

田村 (たむら)

六浦 (むつら)

猩々乱 (しょうじょうみだれ)

東国から京都に訪れた旅僧が、東山の清水寺に立ち寄ります。流れ落ちる滝の音を聞きながら桜を眺めていると、簞をもつた花守の男が現れます。男は旅僧に請われて清水寺の縁起について語ります。昔、延鎮という僧が、淀川の水上に金色の光が輝いているのを見つけます。不思議に思いそのもとを訪ねると、行観居士という老翁があり、延鎮に檀那（僧に金品を施す人）を待つて寺院を造営せよと言い、消え去ります。延鎮はその言葉に従い、坂上田村麻呂を檀那として清水寺を建立したのです。

男はさらに旅僧に京都の桜の名所を漏れなく教え、春宵一刻価千金の言葉になぞらえて春を愛でます。旅僧が不思議に思い男に名を尋ねると、「正体を知りたければ私の帰る方を『質なさい』」と、田村堂の扉を押し開けて中へ消え去りました。

旅僧が夜もすがら桜の木の下で読経していると、田村麻呂の靈が在りし日の武将の姿で現れます。賊徒討伐に出陣するにあたって清水寺に祈念しその千手觀音の加護によってついに平定したこと再現し、その靈験ありたかさを物語るのでした。

前半のクセでは京の桜の名所を示しながら、春を讀んで美しく舞います。一転、後半のキリは千手觀音の加護のもと、賊徒と奮戦する有様を荒々しくかつ平安の武将として高貴に舞います。

都の僧が陸奥を目指して旅をする途中、鎌倉の六浦の里にある称名寺を訪れます。頃しも秋で、周囲の山々は紅葉で色付いています。しかし、本堂の庭にある一本の楓だけ、なぜか紅葉せず青葉が茂っています。僧が不思議がっていると、里の女が現れてそのいわれを僧に物語つて聞かせます。

昔、藤原為相がこの寺を訪れた際に、この楓が他より深く色付いているのを見て、「いかにしてこのひととともにしぐれけむ山にさきだつ庭のもみぢ葉」という一首を詠み、この歌に感激した楓が以来紅葉をやめていました。

あまりに楓の心を詳しく語る女を不思議に思つた僧が名を尋ねると、自分はこの楓の精であると名乗つて消えていきました。

僧たちが読経していると、再び楓の精が現れます。楓の精は、草木國士悉皆成仏の理を説き四季の花を愛で、紅葉の下で舞を舞い、木の間で紛れてまた消えていました。

木の精を扱つたものとして他に、遊行柳と西行桜、そして杜若などがあります。前者二曲が翁姿で舞い、杜若は伊勢物語を題材とするため少し色っぽい所があります。対してこの六浦は、梅、桜、卯の花、紅葉と移り行く四季の花の眺めを静かに美しく、しようとさらりと明るく舞います。

日時：平成26年9月27日(土) 12:00開演(11:15開場)

場所：十四世 喜多六平太記念能楽堂

主催：公益財団法人十四世六平太記念財団

第36回

喜多流 青年能

次回喜多流青年能予告

平成27年5月23日(土) 11:15開場／12:00開演

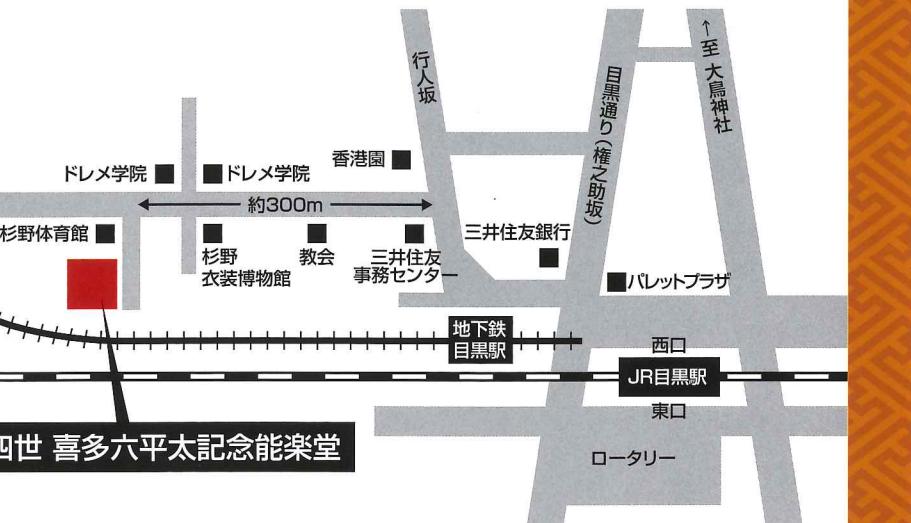
能「花月」谷友矩 ほか狂言など
能「半蔀」塙津圭介
能「枕慈童」高林昌司

チケット

一般4,000円(前売3,500円)
学生2,500円(前売2,000円)

連絡先

十四世 喜多六平太記念能楽堂
品川区上大崎4-6-9/tel.03-3491-8813



※お客様専用駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮願います。

番組

前シテ(童子)
後シテ(坂上田村麿の靈) 高林昌司

能
田 村
ワキ(旅僧) 御厨誠吾
ワキ連(従僧) 野口琢弘
ワキ連(従僧) 殿田進也

間狂言(清水寺門前の者) 河野佑紀

後見 高林呻二
佐藤寛泰

(大鼓) 飯原岡

谷 佐々木 塩津狩
佐々木 多圭富
友矩門介一
狩大内栗野
野村了成
一定信雄

富孔一明

(笛) 小野寺竜一

狂言
舟ふな

シテ(主) 野村万蔵

アド(太郎冠者)

野村拳之介

休憩二十分

能
六 浦
前シテ(里女)
後シテ(楓の精) 佐藤陽

ワキ(僧) 館田善博
ワキ連(従僧) 森常太郎
ワキ連(従僧) 梅村昌功

間狂言(六浦所の者) 野村太一郎

(大鼓) 森佃

地謡 友栗大谷
枝谷島貴良太郎
真浩輝友史(太鼓)
也之久矩(笛)

栗林
林祐雄一郎
祐輔一郎

後見 中村邦生

佐々木多門

地謡

休憩十分

能
猩々乱 ワキ(高風) 殿田謙吉
シテ(猩々) 佐藤寛泰

後見 狩野津了哲一生

地謡

(小鼓) 曾國(大鼓)
和川

塩大友高
津島枝林
圭輝眞昌
介久也司

金香出内
子川雲田
敬靖康成
一郎嗣雅信

松觀
田世弘元
之伯